
木乃伊（ミイラ）

小説の鉄人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木乃伊ミイラ

【Zコード】

Z6952D

【作者名】

小説の鉄人

【あらすじ】

「ぐぐ」く普通の公務員の木下が、同じ事の繰り返しの日常に自問自答し、社会人となつて働く前の自身の理想と現実のギャップに葛藤していた。そんな木下と学生時代から付き合つていた妻・香織も木下が公務員となつて組織に染まつていく姿に失望していく。そして、公務員を取り巻く環境が変わっていく作今、様々な周囲の思惑と柵による余波が木下にも襲いかかる。

その1（前書き）

書いてこくちに手探しでストーリーを創っています。構成という意味では時々おかしいとお思いになることもあるでしょうが、「」了承下さい。また、リアルな描写がありますがあくまで全てフィクションです。

木下がりのいつもの風景である。

「お～い！電話が鳴つてんぞ！早よとれよ！」

「はい！ただいま

電話に出る係はこの部署で一番若い木下の仕事だった。

「はい、産業振興課です」

「あのなあ・・あんたとこがやつてる3丁目の工事どないなつとんねん

「と、申されますと？」

「あんたとこの工事のせいで庭の花がかれてもうたやんひつが」

「そうですか・・申し訳ありません」

工事のせいで花が枯れるなんてことは有り得ないことなど専門知識のない木下にもすぐにわかった。しかし、市民からのクレームには下手に言つて訳するより相づちを打てと先輩から口酸つぱく言われていた。

「どないしてくれんねん！弁償せえや！」

相手は少なくとも50過ぎぐらいのいかにも「河内のおっさん」という感じの中年男性だった。

「そう申されましても私どもの方としましても・・」

「つべこべ言わんと弁償してくれたらそれで住む話ちやうんか」この手の輩は、嵐が通り過ぎるのを待つように馬耳東風と聞き流すのが最適である。延々とこの輩の説教は続いた。気付いたら30分は経っていた。

「もうええわ！」

そう痺れを切らじて電話を切つた。いつもこの輩は、大体無職で生活保護を受けてるか定年退職し年金生活でやりくりしている人間が殆どである。文句を言つて

とはできても、法的手段に出る事などは経済的に不可能である。木下からすればこの数年の経験でそのことも熟知していた。

「おい！木下！平田公園の現場に行ってくれ」

「はい」

仕事という仕事は全て木下に押しつけられていた。その間先輩は漫画やスポーツ新聞を読んだりして長い休憩を楽しんでいる。中には居眠りしている者もいる。（いいなあ・・この人たちは・・俺にはいつサボり権が与えられるんだろう）

忙しいのは予算を使い切らなくてはいけない年度末だけである。先輩達は監視も厳しい、その

時期だけ一生懸命働けばいい。近年、公共工事の削減も重なっています年々その傾向が強くなっている。一般企業なら会社を潰さないためにしゃかりきになつて仕事を獲つてきて、リストラの対象にならぬよう一生懸命働くが、公務員はよっぽどの事がなければクビになる心配もない。触らぬ神に祟りなしの精神で定年を待てばいい。

いつものように渋々現場に着いた。今回の仕事は公園の改修工事である。現場の造園屋はこの8月の猛暑日に暑苦しい作業着で文字通り汗水垂らして働いている。木下はこの姿をクラーの効いた部屋でくつろいでいる連中に見せてやりたかった。見たところで、「がんばつてるなあ」ってぐらいしか感じないだろうが・・彼らには「感じる」と言ひ神経が極端に麻痺している。

「ああ木下さん・・お疲れさんです」

お得意さんの山本造園の現場主任の畠田であった。自分より2倍以上年上なのに低姿勢で接してくれる。

「お疲れ様です。そういうえばフェンスはまだ入らないんですか?」

「ああフェンスは最後ですわ。でも絶対部外者は入れんようにしますさかい」

「それならいいんですね」

特に意味はない。思いつきで物言つてこの工事のことを100%知つているふりをすればいい

のである。

「この図面でいいですか?あと遊具の保証書とかももう渡しますわ」

4、50ページはある分厚い本のような図面付きの書類を渡された。一通り現場を視察して、

「そろそろ失礼します」

そう言い残し、平和な町のお巡りさんのように現場を去る。帰りにさつきのクレームのあつた3丁目の工事現場を覗いた。水路の工事をしているはずだ。

しかし、現場には誰もいない。ドリルなどの道具も、ハツつたコンクリート片も放置したま

まである。すると、60代前半ぐらいの男性が何か言いたげに木下を見ていた。

「あんた役所の人かいな?」

やたら馴れ馴れしい。昼間だというのに酒の臭いがぷんぷんする。

「はい。木下と申します」

「ここで工事してた奴らなあ。文句言つたたらへそ曲げて帰りよつたわ。根性あれへんわ」

この男の工事現場の連中との武勇伝は30分続いた。この男は工事現場から4軒先に住む原口といつ名前らしい。この工事はほんの半日で終わる工事であり、そんなに騒音もないはずで

ある。

「すいません！仕事があるんで失礼します」
何とか強引に逃げ切った。

役所に帰ると、原口と喧嘩した業者の説得に迫られた。

「何とか仕事に戻つて下さい！今からやれば今日中に終われますし」

「あほ言つな！お前らがあのおっさんと話つけとけへんから」「うなつたんちやうんか？」

「一応連絡は行つてゐるはずなんですが・・・」これはまあ穩便に・・

「あかん！あのおっさんどうにかするまで仕事には入らん」

「わかりました・・じゃあ今日やつてくれたら今日の分の支払いを今月中にします」

「ほんまかいな！それやつたらやつたるわい！あんなおっさんがつんいわしたるわ」

建設業者というのは得てして、頑固で子供じみた人間が多い。すぐに駄々をこねるが「アメ」

を与えたらすぐに機嫌を直す。資金繰りが大変な中小企業からすれば、一日でも支払いが早い方が有利難い。こういう手法も先輩直伝の“公務員マニコアル”である。

夕方定時になると先輩が続々と帰つていく。毎日きつちつ同じ時間にタイムカードを押して

帰つていく。木下だけは一日の報告書と仕事の契約書の仕上げがどつさりと残つている。何も

木下が要領が悪いわけではない、体育会系の習わしに従つてやつているだけである。そんな決まりは無いのだが・・

ようやく当たりが真つ暗になつた頃仕事が終わる。週に3回は先輩の分もタイムカードも

押さなくてはならない。いわゆる”カラ残業”である。

その1（後書き）

自分は公共工事に関する仕事をしているのでその体験を元に書いて見ました。これから今までの”お役所仕事”ができにくい世の中になり、公務員の待遇といつのも大きく変わらうとしています。一般の方にはわかりにくい業界であるのでは非知つて頂けるきっかけにしたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6952d/>

木乃伊（ミイラ）

2011年1月16日08時10分発行